

渡月橋

Bridges of the World

京都府・京都市



日本・2008年発行

渡月橋の歴史は古代にまで溯ります。嵯峨野一帯は渡来系の氏族・秦氏によって開発され、その支配地域の大堰川に橋が架けられた可能性が高いと推測されています。

嵐山の周辺は、平安時代から院の離宮や貴族の別業が営まれ、やがて多くの寺院も建てられ、景勝地としても有名になっていきました。大堰川に架けられた橋は、南岸の法輪寺によって維持管理が行われてきたようで、法輪寺橋とか法輪橋と呼ばれることが多かったようです。

大堰川に育まれた嵐山は、紅葉の名所としての名声も鎌倉時代には定着していきました。そして「渡月橋」という名前は亀山天皇が「くまなき月が渡る」のに似るという意味から名付けたと言われています。

渡月橋が現在の位置に架けられたのは慶長11年(1606)のこととされています。江戸初期の実業家角倉了以すみのくらりょういが大堰川の上流の保津川の開削工事を行ったときのことで、保津川の上流地方の木材や薪炭を京へ輸送するため、大掛かりな河道の開削が行われました。その結果、下流の桂川沿岸は材木取引で活況を呈することになりました。

中世以降、嵐山一帯は天龍寺の支配下にありましたが、橋の管理は依然として法輪寺が行っていたようです。しかし橋の維持管理は大きな負担になっていたようで、江戸後期には天龍寺と相談の上で年限を切って橋を利用する人々から橋銭を徴収していた記録があります。

法輪寺は本尊の虚空蔵菩薩から福德知恵を授かるとして十三参りで賑わいます。お参りした後、渡月橋を渡る時、後ろを振り返ると、せっかく授かった知恵が逃げってしまうという言い伝えが今も残っています。

木橋時代の渡月橋は構造的には粗末なもので、明治になっても人1人がやっと通れる程度の板橋であったため、洪水による被害を度々受けています。

現在の渡月橋は昭和9年(1934)にコンクリート杭、鋼桁の橋となったものです。「外形上旧態を保存すること」に意が払われ、スパンは10m強と短く、木製の桁かくしや高欄に古くからの木造の様式を採用することによって、外見的には木橋に見えます。もし、ここに近代的な橋を置いたなら嵐山の風景はその潤いを無くすことでしょう。



撮影：松村 博